


● シリーズ 私の見た日本 Vol.242

日本：空間が文化になるとき

Luis Pablo Yon Secaida (ルイス・パブロ・ヨン・セカイダ)

北海道大学の博士後期課程在籍。グアテマラの農村地域における復興および発展をテーマに、地域の文脈に即したフレームワークの応用に関する研究を行っている。日本に7年間に住し、日本の建築や文化を多角的に経験してきたことから、文化が建築や都市空間といった物理的環境をどのように形成するかについての独自の視点を有する。



建築とは本質的に、空間を設計するためのプロセスである。しかしその実践は、そこに身を置く利用者や、その利用者による解釈から切り離して考えることはできない。建築は体験されて初めて成立し、その体験は個人の期待や欲望、先入観によって必然的に形づくられる。この意味において、空間は中立的な器ではない。空間は人と親密な関係を結び、その使われ方や付与される感情、さらには存在の時間性を規定する。人と空間とのこの関係性こそが、デザイナーを惹きつける要素であり、感情を喚起し、アイデンティティをつくり出す可能性を秘めている。ゆえに空間は人間的でなければならず、日常の一部として能動的に機能する必要がある。それは機能的な要求に応えるだけでなく、感情と感覚にも応答するものでなければならない。外国人にとって、自らが育ってきた文化的、あるいは建築的な背景とは異なる状況に触れることは、しばしば違和感を伴う体験となる。こうした感覚は建築ではもちろんのこと、それ以外でも生じるが、自らの「当たり前」と大きく異なる文化に接したとき、特に顕著となる。文化とは、実践や価値観、象徴の集合体であり、違いがあるからこそ人々の関心を惹きつける。日本はその典型例である。外国人にとっての日本の魅力の多くは、西洋とは大きく異なる習慣や価値観によって形づくられた特異な国という認識があるからだ。文化は、建築をはじめとする物理的環境を通して表出する。日本は、伝統建築と現代建築の対比によって広く知られており、とりわけ東京のような都市では、古いものと新しいものが緊張関係を保ちながら共存している。日本が「過去と未来が会える場所」として語られてきたのは偶然ではない。建築は、日本という国のイメージを投影し、外部の人間の先入観を肯定したり揺さぶったりする役割を果たし

ている。専門的な知識がなくとも、空間を通じて日本の多様な側面を感じ取ることは難しい。したがって、日本での体験の多くは、建築とその空間言語と深く結びついている。ある建築や環境は、タイムカプセルのように特定の歴史的瞬間を封じ込め、それらが同時に存在することで、暮らすことや訪れることの体験をより豊かなものにしている。そして、ここで一つの問いが生じる。こうしたことは、日本に限らず、現代建築全般にも当てはまるのだろうか。今日の建築が用いる言語は、何を表しているのだろうか。日本における現代建築は、しばしば技術的進歩と結びつけて語られ、抑制された、より純化された空間言語の再解釈として捉えられる。この「純粹さ」は、要素を意図的に減らして、空間と素材の明快さを積極的に強調させることで実現される。外国人にとって、こうした状況は常に二重性を生み出す。古いものと新しいものは、対比的でありながら相互に関連もしており、異なる二つの体験が同時にもたらされるのだ。日本には、江戸時代に人気を高め、現在も日本独自の特徴を残している宗教施設や祭りに関連する建築、あるいは居酒屋のように、日本文化の実践と深く結びついた空間が存在する。他方で、現代建築は、オフィスや商業など大都市の要請に応える形で発展してきてもある。そこでは、より開放的な空間構成や自由な平面、控えめなインテリアが求められ、こうしたデザインの特徴は日本の多くの都市で見出すことができる。では、外国人はいかにして日本とその文化を真に体験することができるのだろうか。日本と他国との差異は、厳密に名付けることの難しい無数の小さな出来事に宿っていることが多い。こうした瞬間は、建築や都市の中での活動がきっかけとなり、外国人と日本人との交流を通して立ち現れる。日本での経験につい

て尋ねられると、多くの場合、まず人との出会いが語られ、その舞台となった空間は後から思い起こされる。建築は体験に影響を与えるが、それを完全につくっているわけではない。高齢の女性が営む小さな店であれ、地域の人々が集う花火大会の会場であれ、外国人にとって日本を印象づけるのは、建築そのものというよりも、その中で起こっている文化体験というべきだろう。そのとき、建築は二次的な役割を担い、そこで行われる活動の魅力を高める装置として機能する。建築自体が主役になる瞬間もあるが(城や寺院の訪問など)、大半の場合、外国人は建築そのものを独立した存在としてではなく、建築様式とそこでのアクティビティを一体のものとして求めている。外国人が訪問者であることをやめ、日本で生活し始めると、体験は大きく変化する。長期滞在は、かつて特別に感じられた出来事を日常へと変え、日本は観光地ではなく「ホーム」となる。そのとき建築は、文化の背景から、日常を構成する要素の一つへと位置づけを変える。そうなったとき、多くの外国人は、日本で真に求めるものは何か、日常を超えた体験をどの空間で見出せるのかと自問するようになる。その結果として生まれる最も意味深い体験は、観光客と同様に自発的に生じることが多いものの、より深いレベルになる。日本での生活は、当初考えていた日本の魅力を問い直す機会になり、それによって建築を異なる視点から捉えることを可能にする。建築は文化の背景として存在することをやめ、時に日常生活の中心的な要素となる。人間の好奇心は空間とのより意識的な関わりを促し、単純な観光の論理から脱却して、建築の内部で生じる文化へと入り込んでいく。私にとっての変化の例を挙げると、居酒屋での関係性の変容がある。かつては単なる観光

体験に過ぎなかったものが、より隠れた店舗や予想を超えた体験への探求へと進化するのだ。同様の変化は祭りでもある。体験は観覧から参加へと移行し、祭りの活動や屋台に入ること、空間の一部になろうとした。こうした直接的な関わりを通じて、建築はより深い次元で体験される。日本には「隠れ家」と呼ばれる場所がある。公に知られることよりも、個人にとっての意味を持つ親密な空間である。那覇の細い路地にある老婦人が営むバーでは、テーブルが二台しか置けず、会話は人

生の核心に迫る。昭和期の広告に囲まれた札幌の食堂では、パンク歌手、流暢な日本語を話す外国人とその友人、店主が同じテーブルを囲む。小さな川辺では、老漁師が漁師人生を物語る。こうした場所では、空間は凝縮され、体験はきわめて個人的なものとなる。これらの瞬間は、強い造形的主張を持たずとも、建築が深い意味を持ち得ることを示している。簡素であるがゆえに人の関係性を受け止め、機能を果たすためだけに存在するのではなく、日常の硬直した規範から一時的に解

放される場として機能する。こうした親密さと近接性を持った場所は、人と空間の新たな関係を可能にする場所である。おそらく日本や日本の建築は、表面的なレベルでの関わりを超えようとする意志があってはじめて本当の姿を見せるのだろう。その努力(言語を学び、社会規範を理解し、初期の不快感を受け入れること)こそが、他では得難い記憶となる文化と空間の体験への発見を可能にしてくれる。人、文化、そして建築が交差するその地点に、私にとっての「私の見た日本」がある。

